

と化粧品取り扱いも始めていた。

昭和四十年、第一工業高校（現開新工高）の化学の先生にと話があり、薬局は友人の名義を借りて営業することにし、学校の非常勤講師となった。どうせなら常勤してくれと要請され、昭和五十二年まで教職の道に携わった。半年程失業保険を受け、同年九月コルセイ・ドラッグ薬品販売会社に勤務、平成二年まで働いた。

現在は近くの学校法人常盤調理学校の非常勤講師として、週に五時間くらいの講義をしている。若い人の中に入り仕事ができるのは、健康のためにも最高と思っている。

数年前、孫と共に、帰国の第一歩を印した舞鶴の引揚者公園を訪ね当時を偲んできた。

バイカル湖の思い出

熊本県 島野郁啓

大正十年二月二十四日、八代市で産声をあげ、地元の小学校を終え、八代中学へ。昭和十一年、中学四年のとき熊本へ移転、熊本中学へ編入試験をパスして転校、二年間学び、早稲田大学専門部商科へ入学。昭和十七年三月卒業と同時に朝鮮総督府忠清南道庁へ奉職。官庁勤めが性に合わず一年勤め退職し帰郷。

昭和十八年二月一日、熊本の本十三連隊に入隊。同年四月ハイラルの歩兵二十三連隊へ転属。

昭和十九年八月、錦州省阜新の歩兵第二四一連隊へ転属し、乙幹の軍曹として初年兵教育に従事した。分遣隊として赤峰に行き、万里の長城付近の八路軍の討伐に遠征した。

終戦直前熱水で陣地構築中、錦県から部隊ごと奉天に移動し終戦を迎えた。奉天に武装したまま一カ月滞

在、日清製粉の工場内に籠城中、満人の暴動が三日三晩続き、騒然とした空気が流れた。中国人が工場内に紛れ込み、処刑したハブニングもあった。武装解除され奉天北陵へ集結のため移動していると、中国人から唾をかけられ罵詈雑言を浴びせられ、そのしつべ返しをされ、戦に敗れたんだと実感させられた。

昭和二十年九月中旬奉天をたち、十月中旬ウスリ河を渡りブラゴエに到着。二三日して「ダモイダモイ」と騙され、バイカル湖近くのイルクーツクの東側の山中で伐採を一カ月やらされた。同年の十一月、何かの調子で十人が選ばれ、ソ連の将校と歩きながら、お互い片言の英語で会話をし、意気投合、語学の大切さを痛感した。

昭和二十一年三月、イルクーツクから列車でバイカル湖畔のセルジャンカの既存の大隊に部隊ごと編入され、線路の工事作業、石の切り出し、橋の修理、更には屠殺場勤務と生涯初めてのことも経験した。最後には洗濯班長をし、昭和二十二年五月まで世話になった。

衣服は軍服のまままで通し、食糧は高粱、ポミー半々の粥、パンと少々の砂糖等が支給された。ラーゲルは長屋式の二段ベッドだった。発疹チフスで何人か亡くなった程度で、栄養失調での死亡者はなかった。『日本新聞』を時々見たくらいで民主教育は全然なかった。

こういうと恵まれたラーゲルのように思われるが、飢えと寒さの中の重労働は、いずこも同じ苦しみであった。

入ソ以来階級章をつけ軍隊組織そのままに生活しナホトカへ向かった。風の噂で、反動分子と烙印を押され、帰国出来ないかもということで、ナホトカの直前で階級章を外した。

昭和二十二年五月二十七日舞鶴へ上陸、六月三日父母の待つ故郷熊本市船場町へたどり着いた。二カ月静養をし、衣料品販売業の「ナルミ商会」に就職、三十七年間勤めた。

昭和二十八年現在地へ定住し、退職後は自治会長、公民館副会長等の要職におされ、地域への恩返しと思

って頑張っている。また、結婚相談所をし、三十組の縁組みをし、世の中の少子化に歯止めがかかればと願っている。

バイカル湖畔の収容所には熊本県人が二十五人、県人会を開いてお互い励まし合い抑留生活を送った。帰国してからも会合をしていたが段々亡くなられ、生存者で毎年二回集まり、健康を祝し往年を偲んでいる。